

2024 年度  
情報経営イノベーション専門職大学  
入学者選抜試験 一般入試 B 日程

# 国語

## 注意事項

1. 試験時間は 60 分。
2. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないこと。
3. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁、乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせること。
4. 解答用紙には解答欄以外に受験番号等の記入欄があるので、監督者の指示に従ってそれぞれ正しく記入すること。
5. 解答は、問題に対応した解答用紙の解答欄にマークすること。
6. 問題冊子は持ち帰らないこと。
7. 試験終了まで退出しないこと。

次の文章を読んで、以下の各問いに答えなさい。

① 500円玉に500円の価値があるのはなぜなのか、という問いをもう1度問いかけなければなりません。そして、この問いが、私の『貨幣論』の出発点です。

では、なぜ私はこの金属のかけらを500円の価値ある貨幣として受け取るのでしょうか？ もちろん、私がモノとして欲しいからではありません。さらに、国がこれをおカネとして使えと命令しているからでもありません。これが21枚目の500円玉でしたら、とりわけそうです。いや、1枚目の500円玉であっても、私は受け取らなくても牢屋ろうやに入れられることはありません。

答えは簡単です。私が500円玉を500円の価値を持つおカネとして受け取るのは、「ほかの人」がそれを500円の価値あるおカネとして次に受け取ってくれると思っっているからです。「ほかの人」がそれを受け取って、代わりに500円の価値のモノを渡してくれると思っっているからです。この場合、「ほかの人」といっても、特定のだけかではありません。日本社会に住すんでいるほとんどすべての人のことです。

田中たなかさんも、渡辺わたなべさんも、安部あべさんも、キムさんも、スミスさんも、それを受け取って、代わりに500円の価値のモノを渡してくれるからです。

すなわち、おカネの価値とは、この「私」が与えるのではない。国が与えるのでもない。「ほかの人」が与えてくれるのです。いや、もっと広く、「社会」が与えてくれるのです。

「貨幣の価値は社会が与える。」

この命題の重要性は、いくら強調しても強調しすぎることはありません。事実、古今東西、貨幣②に関して少しでも意味のある研究をした人は、すべてこの命題に達しています。たとえば、カール・マルクス。マルクスの『資本論』の冒頭の部分に「価値形態または交換価値」と題された一節があります。俗に「価値形態論」と呼ばれるこの節は、マルクスが書いたもつとも重要な文章の一つです。そして、その「価値形態論」が最終的に達した結論は、まさに右の命題なのです。また、マルクス経済学に対立する学派として、1870年代に新古典派経済学が誕生しました。新古典派経済学は、現在の経済学の主流派となっていますが、その創始者の1人がカール・メンガーというオーストリアの経済学者です。同じオーストリア人であったフリードリッヒ・ハイエクの自由放任主義思想に大きな影響を与えています。このメンガーが貨幣に関する研究で最終的に到達したのも、まさに右の命題です。

しかしながら、「貨幣の価値は社会が与える」という命題は、マルクスやメンガーの貨幣理論の到達点であると同時に、③その限界点でもある

のです。事実、彼らの貨幣理論は、この命題から先に進めませんでした。だが、ここで分析を止めてしまうと、貨幣の本質をまったく見失ってしまうことになります。

なぜならば、貨幣だけでなく、資本主義社会では、すべての「商品」の価値も社会が与えているからです。たとえば、いま私が飲んでいる缶コーヒー。缶コーヒーの価値は、一体だれが決めていたのでしょうか。生産者側から考えてみましょう。生産者は缶コーヒー1缶にたとえば100円の価値があると考えて、生産して売っています。では、なぜ、100円の価値があると考えたのか。もちろん、それは生産者自身が100円を払ってその缶コーヒーを飲みたいと思っているからではありません。生産者はそれを何万本も作っているわけです。1本や2本、まあ、5本ぐらいいは我慢して飲めるかもしれませんが、100本も飲めば死んでしまうでしょう。生産者が缶コーヒーに100円の価値があると考えるのは、沢山の「ほかの人」がそれを100円で買ってくれるからです。つまり、缶コーヒーという「商品」の場合も、生産者にとっては、「ほかの人」、さらにはもっと広く「社会」が価値を与えているということです。言い換えると、

「資本主義社会においては、貨幣の価値だけでなく、すべての商品の価値も、社会によって与えられる。」

ですから、おカネの価値は社会によって与えられると言うだけでは、貨幣と商品とを区別することはできないのです。マルクスの場合には「貨幣は商品である」と宣言をして、価値形態論を終えてしまいました。メンガーの場合も「貨幣はもっとも多くの人が欲しがっている商品である」という結論で研究を終えてしまいました。ともに、「貨幣とは何か?」という問いには、きちんと答えてはいないのです。

では、<sup>④</sup>貨幣と商品とはどこが違うのでしょうか?

その違いは、たとえば缶コーヒーという商品を買ってくれる「ほかの人」と500円玉という貨幣を受け取ってくれる「ほかの人」に、それぞれ、「あなたはなぜ缶コーヒーに100円の価値があると思っているのですか?」という質問と「あなたはなぜ500円玉に500円の価値があると思っているのですか?」という質問を投げかけたら、直ちに明らかにになります。

たとえば缶コーヒーの場合、「ほかの人」は「私はコーヒーを飲みたいからだ」と答えるはずですが。確かに生産者にとっての缶コーヒーの価値は、自分ではなく「社会」が与えているのですが、実際に缶コーヒーを買った消費者からすると、その価値はコーヒーに対する「欲望」が決めています。その消費者にとって、1本の缶コーヒーは、眠気を覚ますために、あるいはどの渴きをいやすために、100円を支払っても欲しいモノなのです。つまり、商品の価値とは、それをモノとして消費する人の「欲望」という実体的な根拠があるのです。

缶コーヒーのような消費財ではなく、コーヒー豆のような原材料やコーヒーメーカーのような器械の場合は、購買者はそれ自体をモノとして欲しいわけではありませんが、最終的には、その価値もいくつかの生産過程を経て作り出されるコーヒーを直接飲む人の欲望が決めることにな

ります。

これに対して、私の500円玉を受け取ってくれる「ほかの人」に、「なぜ500円玉を500円の価値があると思っているのですか？」と聞いたなら、缶コーヒーの場合とはまったく異なった答えが返ってくるはずですよ。その「ほかの人」も、「私はモノとして500円玉を欲しいからではありません、『ほかの人』がそれを500円の価値あるおカネとして受け取ってくれると思ってるからです」と答えるはずですよ。さらに、その「ほかの人」にとつての「ほかの人」に、「なぜ500円玉を500円の価値があると思ってるのですか？」と聞いてみましょう。すると、その人もまったく同じ答えをするはずですよ。「ほかの人」の「ほかの人」の……「ほかの人」に、次々と聞いていっても、同じ答えしか返ってきません。この問答は、永遠に続きます。

おカネの場合は、どこまでいっても、モノに対する人間の欲望に行き着くことはありません。だれに聞いても、「ほかの人が500円の価値がある貨幣として受け取ってくれるから、私も500円の価値がある貨幣として受け取るのです」と答えるだけなのです。だれもが、「ほかの人が貨幣として受け取ってくれるから、私も貨幣として受け取るのです」と答えるのです。この答えをすこし縮めて言い直すと、「ほかの人もが貨幣として受け取るからだれにとつても貨幣なのである」ということになります。さらに、この文章を受け身に直すと、「貨幣とは貨幣として受け取られるから貨幣なのである」ということです。思い切つて縮めてしまうと、以下になります。

「貨幣とは貨幣であるから貨幣である。」

これは、「自己循環論法」です。木で鼻をくくつたような言い回しで申し訳ないのですが、別に奇をてらっているわけではありません。真理を述べているのです。貨幣の価値には、人間の欲望のような実体的な根拠は存在しません。それはまさにこの「自己循環論法」によってその価値が支えられているのです。そして、この「自己循環論法」こそ、貨幣に関するもつとも基本的な真理です。最初に提示した、なぜ500円玉には500円の価値があるのかという問いに対する、究極の答えにほかなりません。

これで、おカネの謎が解けたことになります。それは、じつさいは、形而上学的けいじじょうがくでも謎でも何でもないのです。

最初に、「おカネのおカネとしての価値」 √ おカネのモノとしての価値」という貨幣に関する基本定理を証明しておきました。それは、結局、「貨幣とは貨幣であるから貨幣である」という貨幣の自己循環論法から導きだされた定理にほかなりません。

貨幣が貨幣として人から人へと手渡されていくのは、人々がそれをモノとして欲しいからではありません（国が命令しているからでもありません）。単に、貨幣として人から人へと手渡されていくからにすぎません。いや、「基本定理」が示したように、モノとしての貨幣のほうがそれと交換に手に入るモノよりも欲しいモノならば、だれも貨幣をほかの人に渡さず、自分でモノとして使います。そのとき、貨幣は貨幣でなく

なってしまうのです。貨幣とは、すでに述べたように、よく言えば「天下の回りもの」ですが、悪く言えば、だれも手元には置きたくない「ババ抜き」ゲームの「ババ（ジョーカー）」にほかならないのです。

ということは、貨幣が貨幣として流通するためには、モノとしては価値がなければいけません。

もちろん、太古の時代は、貨幣経済が未発達で、貨幣がいつなるとき貨幣でなくなるかもしれないというリスクを常に抱えていましたので、そのリスクに備えるために、おそらく無意識に、人々はモノとしても価値のある金銀などを貨幣として使っていました。そのうちに貨幣経済が安定してくると、金銀の重さや品質をチェックする不便さを取り除くために、鑄造された金貨や銀貨が使われるようになりました。

さらに、金貨や銀貨は持ち歩くのは重たいし危険だというような理由から、金貨や銀貨それ自体ではなく、金貨や銀貨との交換を保証する証書や紙券が、金貨銀貨の代わりに貨幣として流通するようになります。いわゆる兌換紙幣だかんです。そして、第2次世界大戦後になると、金貨や銀貨との交換などということは忘れてしまって、1000円や1万円という金額を印刷してある証書それ自体が、不換紙幣として流通し

ています。いま私たちが使っている1000円札や1万円札です。また、これは大昔から始まっていますが、金や銀を使うと、擦り減ったりしてもつたないので、少額の取引には、鉄や銅やニッケルといった安い金属が使われるようになります。これが100円玉や500円玉のような硬貨の起源です。

このように貨幣の歴史をたどると、最初は、モノそれ自体に価値のあった金銀から、金貨銀貨になり、鉄貨や銅貨も併用されたり、次第に価値の低いものに代わってゆき、今ではそれ自体にはほとんど価値のない金属片や紙切れが使われているということになります。

その先にあるのは、なんでしょう。紙幣も硬貨も、価値は低くてもモノであることに変わりはありません。そこで登場するのが、電子情報化された記号、さらにいえば「数字」です。貨幣とは貨幣であるから貨幣であるという自己循環論法によってその価値が支えられているのなら、モノである必要はまったくないというわけです。そのように、貨幣のモノの部分⑥を完全に削りとった究極の形態が、デジタル通貨なのです。電子情報化された数字だけを貨幣として流通させるのです。

（丸山俊一＋NHK「欲望の資本主義」制作班「岩井克人「欲望の貨幣論」を語る」による。なお、問題作成の都合上、一部改変した箇所がある。）



・21枚目の500円玉……「通貨の単位及び貨幣の発行等に関する法律」では、「貨幣は額面価格の二十倍までを限り、法貨として通用する」と書かれている。そのため、筆者は本文より前の部分で「40個集めて、2万円の買い物をしようとしても、21個目からは法律上はおカネではなく、単なる銅と亜鉛とニッケルの合金でしかないのです」と述べている。

・最初に……筆者は本文より前の部分で「あるモノがおカネとして流通しているときには、おカネとしての価値はモノとしての価値を必ず上回っている」ことを証明し、おカネが使われるのはおカネ自体が価値の高い商品であるという、貨幣商品説を否定している。

**問一** 傍線部①「500円玉に500円の価値があるのはなぜなのか」とあるが、その理由として最も適当なものを選び、記号で示せ。

- ア 金属の原価や製造コストまで含めると、500円玉には500円の価値があると考えられるから。
- イ 500円玉を価値あるものと見なし、500円を払ってでも欲しいという人が世の中にいるから。
- ウ 実際の価値はともかく、法律で、500円玉には500円の価値を持たせて流通させるよう決められているから。
- エ 次に500円玉を受け取ってくれる人が、500円の価値があるものとして受け取ると皆が思っているから。

**問二** 傍線部②「貨幣に関して少しでも意味のある研究をした人」の説明として最も適当なものを選び、記号で示せ。

- ア カール・マルクスは『資本論』の最終章で、貨幣の価値は社会が決めるという結論に達した。
- イ マルクスの弟子であるカール・メンガーも、マルクスと同じ結論に達した。
- ウ 現在の経済学は、マルクスの論理よりもメンガーの論理のほうに価値を見いだしている。
- エ メンガーに刺激を受けたフリードリッヒ・ハイエクは、マルクスの到達した命題を無視した。

**問三** 傍線部③「その限界点でもあるのです」とあるが、なぜ限界点といえるのか。最も適当なものを選び、記号で示せ。

- ア 商品の価値も社会が与えているが、貨幣の価値と商品の価値に差が生じることがあるから。
- イ 貨幣の本質は商品であるという議論を、マルクスやメンガーはすることができなかったから。
- ウ 商品の価値も社会が与えているため、貨幣と商品の違いを説明することができないから。
- エ 資本主義では貨幣の価値も商品の価値も社会が決めるが、マルクスは社会主義者だったから。

**問四** 傍線部④「貨幣と商品とはどこが違うのでしょうか？」とあるが、どのように違うのか。最も適当なものを選び、記号で示せ。

- ア 商品は生産者と消費者の両方が認めなければ価値は生まれないが、貨幣は貨幣の価値を認める人がいれば価値が生まれるという違い。
- イ 商品にとつての価値は生産者が決めているが、貨幣の価値は貨幣を使用する人が決めているという違い。
- ウ 商品の価値は社会と、社会の欲望が決めているが、貨幣の価値は受け取る側の欲望が決めているという違い。
- エ 商品の価値は消費する人の欲望という実体的な根拠があるが、貨幣の場合は欲望の実体はないという違い。

**問五** 傍線部⑤「貨幣の歴史」とあるが、その内容として不適当なものを選び、記号で示せ。

- ア 太古の時代は、モノそれ自体に価値のあつた金銀などを貨幣としていた。
- イ 金貨や銀貨などは重量があるなど、持ち運びに難点があるため使われなくなつていった。
- ウ 硬貨に金や銀を使うと擦り減るなどしてもつたいため、近年は安い金属を使うようになった。
- エ 現在は、ほとんど価値のない紙切れが貨幣として使われることがある。

**問六** 傍線部⑥「貨幣のモノの部分に削りとつた究極の形態が、デジタル通貨なのです」とあるが、なぜデジタル通貨は貨幣として流通できるのか。最も適当なものを選び、記号で示せ。

- ア 数字が貨幣となることは目新しいため、なんとしてでもデジタル通貨を手に入れたいという人が多いから。
- イ デジタル通貨は使い勝手がいいことから、流通させるために社会がデジタル通貨に価値を与えたから。
- ウ デジタル化により、金属の価値を考えなければならない従来の貨幣の煩わしさがなくなったから。
- エ デジタル通貨は数字であるためモノとしての価値がなく、貨幣として流通しやすいから。

【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、以下の各問いに答えなさい。

## 【文章Ⅰ】

米国のテック関連ニュースを中心に伝えるウェブサイト「Axios」によると、アルゴリズムの精度でとくに有名なのは、<sup>①</sup>若者に人気の動画プラットフォーム、「TikTok」である。「TikTok」の場合、ユーザーが初めて開くと、異なるトレンド、音楽、トピックを取り上げた8本の人気動画が表示される。その後、ユーザーがどの動画に興味を持ち、何をしたかに基づいて、アルゴリズムを通して新しい8本の動画が繰り返し提供され続け、ユーザーが興味を持った動画が特定される。また、「おすすめ」の提案には、ユーザーの言語設定、国設定、デバイスタイプなども考慮されるという。こうして、「TikTok」側はユーザーに関する十分なデータを収集し、そのデータをもとにアプリがユーザーの嗜好<sup>しこう</sup>を類似ユーザー群の中にマッピングし、グループ化する。同時に、ポストインクされた動画も、類似したテーマに基づいてグループ化される。ここから、機械学習を用いてユーザーたちとユーザーが好む動画コンテンツを引き合わせていき、ユーザーを飽きさせる冗長性や重複を極力回避しながら、なるべくバラエティに富んだコンテンツを提供し続けていくという。

アルゴリズムを利用した「客寄せ」の背景には、プラットフォームが、サイトでのユーザーの訪問数が増えれば増えるほど、そしてユーザーがそれを熱心に利用すればするほど（滞在時間が長く、とくに「いいね！」を押したり書き込みをしたりする行動を起こすこと）、儲<sup>もく</sup>かる仕組みを発達させてきたことがある。同じような興味関心をもつユーザーをなるべく多く集めて、なるべく長く滞留させる―いまや企業の市場価値は、ネット上のユーザー数の増加速度と消費者のエンゲージメント（滞在時間）の強さだとも言われている。つまり、何人のユーザーにどれだけ熱心に見られたかによって、企業の価値が決まるのである。これがいま、アテンション・エコノミーが駆動する<sup>②</sup>テクノ資本主義の戦略の真髄となった。

ネット上では、いかに人々の注目を引いて訪問者をサイトに誘導し、その上で彼や彼女の滞在時間をどこまで引き延ばせるかに関心が集中する。となると、まずは誇張や意外性、あるいはいわゆる「フェイクニュース」やネガティブな感情で「客寄せ」をすることになる。これが「アテンション・エコノミー」の最初の罠<sup>わな</sup>で、テクノ資本主義の論理では、ネット表現空間はフェイクやヒステリックな情報があったほうが（良い）のである。そこからさらに社会の分断<sup>あひだ</sup>を煽<sup>あお</sup>ったり、対立を助長したりすることも、注目を集めるわけだから、アテンション・エコノミーからすれば、〈良い〉ことになる。

アテンション・エコノミーはまた、人間の注目を集め、滞在時間を延ばすだけでなく、何度も同じプラットフォームに戻ってこさせる「中毒



症状」という二つ目の罫を仕掛ける。人間の注意力が金魚より短くなったことを嘆いていたパティノ<sup>註</sup>は、人をサイトに誘導する仕掛けを、カジノのスロットマシンの「中毒」に近いものと説明している。

たとえば、近年流行しているマッチングアプリは、20代を中心にデートの相手を探す人気のプラットフォームとして、このスロットマシンになぞられる。その中でも人差し指で「スワイプ」してプロフィールを見て「親しくなりたい」と思う人を選別する「ティンダー」では、さまざまなプロフィールの紹介を司るアルゴリズム<sup>つかもと</sup>が仕組まれており、利用者がこのアプリケーションを利用すればするほど、好みを正確に予測するように設計することができる。しかし、「ティンダー」のアルゴリズムはそうはなっていないとパティノは説明する。パティノによると、そのような設計では、ランダム性が排除されて予測が確実になりすぎ、同じような人物がおすすめにできてしまつて、アプリケーションへの依存を生み出せない。「ティンダー」の作戦は、なんとかユーザーの滞在時間を引き延ばそうとするために、利用者が魅力的と感じるだろう過去の選択に近い人物と、選択の履歴からかけ離れた人物とを任意に表示するのだという。つまり、利用者の中毒症状を維持するために、巧妙にランダムな結果を提示しているのだという。

こうして、プラットフォームには、利用者に対して、文字通り一喜一憂させる中毒症状を引き起こす仕掛けが埋め込まれていると説明している。しかも、カジノと違って、参加者に年齢制限はない（『スマホ・デトックスの時代』）。

このようなことは、マッチングアプリに限らない。他のソーシャルメディアにおいても、タイムラインには、日常のおしゃべりの合間に、「偶然に」表示される有名人の滑稽な写真、フェイクニュース、極端な思想、ヒステリックな討論、誹謗中傷<sup>ひぼう</sup>など、感情を揺さぶられやすい、つまり中毒症状を引き起こしやすい情報が仕組まれる。パティノの言葉を借りるならば、アテンション・エコノミーは「情報と民主主義の面で疲弊した社会をつくり出し、デジタル信号によって哲学的な考察を封印」（前掲書）するのだ。

アテンション・エコノミーの説明が長くなってしまつたが、これをジェンダーの観点から見ていきたい。アテンション・エコノミーは、どれだけたくさんの注目を、しかも長い時間集められ、何人の「常連」を確保できるかという、言ってみれば「数の専制」であるから、犠牲になり抑圧されるのは、声を上げにくいマイノリティたちであろうことは容易に想像がつく。海外からのニュースでは、とりわけこの弊害が指摘されており、女性<sup>④</sup>、なかでも若い女性を追い詰めていることを問題にしている。たとえば、次のような懸念すべき例が報告されている。

アテンション・エコノミーを追求するあまり、人間に危害を加えていると批判された実態が忘れられている事件として、もつとも記憶に新しいのは、2021年9月のFacebook（現在Meta）の元社員フランシス・ホーゲン氏による内部告発だ。彼女は、Facebookの大量の内部資料

を米議会、さらにはその一部を州検事総長やアメリカ証券取引委員会（SEC）へリークし、その情報を2021年10月に米「ウォールストリート・ジャーナル」などメディアにも提供した。

報道によると、Facebook (Meta) はアルゴリズムによってユーザーに怒りや悲しみなどを誘発させる扇動的なコンテンツを提示することによって、必然的にエンゲージメントを長くする仕組みをつくっていたとされる。このニュースは日本でも幅広く報道されたが、経済ニュースとして取り上げられる傾向が強く、若年の女性たちが被害に遭っていることについてはあまり取り上げられなかった。しかし、米国では、この内閣告発によってとりわけ問題視されたのは、同社の人気写真共有アプリ「Instagram」利用者の10代女性の3人に1人が、アプリを利用することによって自分の体の尊厳を傷つけられ、メンタルヘルスを悪化させており、中には自殺願望まで抱いていたということを同社が把握していたという事実だ。そして、それにもかかわらず、同社は13歳以下の子ども向けの「Instagram」の開発にも取り組んでいたということも明らかになった。ユーザーが若年層に偏っている「Instagram」の成功体験を、さらに生かしたかったからだとされている。ちなみに「ウォールストリート・ジャーナル」が入手した資料によると「Instagram」のユーザーの40%以上は22歳未満だそうだ。

アテンション・エコノミーは、誹謗中傷やフェイクニュースの蔓延の引き金となっているだけでなく、女性や女の子たちの「普遍的な」悩み―自分の体形や外見の罪悪感や自己嫌悪を利用しているという点で、ジェンダーの文脈から強く非難された。この事件をきっかけに、Facebookへの世論の眼差しは一層厳しいものとなっている。

「Instagram」が若年層に人気だということ述べたが、近年、インスタ映えがエスカレートした「デジタル美容文化」も問題になっている。「MITテクノロジーレビュー」によると、この「デジタル美容文化」が女性や女の子たちに対して不自然なほどに白く細く女性らしいといった、実現不可能な理想を押し付けているという。同誌では、

インスタグラムのようなAIレコメンド・アルゴリズムに依存する視覚的プラットフォームが、驚くほど速いスピードで美の基準の幅を狭めている（中略）。民族性がいまいで、完璧な肌を持ち、目や唇は大きく、鼻は小さく、顔の輪郭が完璧な曲線を描く「インスタ顔」は、一般に認められる1つの典型的な美の基準となっている。その多くの部分は、フィルターによって実現されるものだ。

同記事では、これらの美容プラットフォームで「顔フィルター」をすることが、特に若い女性の精神衛生に有害な影響があると指摘している。米国「ニューヨーカー」も、「Instagram」の人気と、その写真のための美容アプリの導入によって顔の美の基準が平準化されると同時に、女

の子たちの「ルックス」はますます商業行為の資本と見なされ、新たな美容整形ブームが到来していると指摘している。目下、エンゲージメント効果が高い「美容アプリ」は、何千人ものフィルター・クリエイターたちの手によって開発され、無料で提供されているという。その後では、世界中の何百万人ものユーザーが毎日この機能を使うことによって大量のデータが蓄積され、さらに「性能の良い」アルゴリズムが日々開発されるというデータ・エコロジーが出来上がっている。「ニューヨーク」によると、「Instagram」では危険性のある美容処置の奨励を禁止する規定を設けているそうだが、「危険性のある美容措置」自体の基準もあいまいで、世界中で美容アプリの人気は止むことはないだろうと言われている。

Facebookの若年層戦略も、デジタル美容文化の人氣も、いずれも「やせ願望」や「白くて美しい肌」という、長く女性たちが目指すように仕向けられ、抱くように開拓された欲望を巧妙に利用したものだ。こうしていま、デジタル空間ではルッキズムの強化や画一的な「女性らしさの強要」の再来が懸念されている。20世紀以降、女性や性的マイノリティたちが闘い、追いつめてきた人間の性の見方の多様性（男女二元論の否定）、人間の性的指向の多様性（異性愛の規範・標準化の否定）、そして社会的なジェンダーの見直し（男性らしさ／女性らしさの固定化の否定）といったジェンダーやセクシュアリティをめぐる豊かな複数性は、アテンション・エコノミーの下で疲弊し、やせ細り、力を失っていくのではないか。

アテンション・エコノミーは、注目の数が多ければ多いほど、そして滞留時間が長ければ長いほど「良い」という「価値観」をもつ世界を築き上げた。それは、「デジタル・トランスフォーメーション」「起業」「ギグ・エコノミー」という21世紀の新奇性ある言葉にくるまれながらも、資本主義の原初的価値である「多数が勝者」という競争原理を、「注目」という資源に帰しながら先鋭的に復活させ、社会を勝者と敗者とに分けしながらネットのユーザーたちを終わらなき欲望と好奇心の世界に引きずり込む。また、数字が見えること、そして、数値を見せられることは、グローバル化し細分化して見通しのきかなくなつた現代、ユーザーたちに「あなたたちは『多数派』の側ですよ」という安心感を与える。企業や政府の側も同様に、社会の全容が見えづらいつつ状況で、多数決というわかりやすい仕組みで世論を味方につけられるアテンション・エコノミーの論理を歓迎し、すすんでそこから正当性を調達するのである。

（治部れんげ 田中東子 浜田敬子ほか『いいね！ボタンを押す前に』所収 林香里「スマホ時代の公共の危機―ジェンダーの視点から考える」による。なお、問題作成の都合上、一部改変した箇所がある。）

語注

- ・アテンション・エコノミー……筆者は本文より前の部分で、「ネット上でいかに多く、いかに長くユーザーの注目を集めるか、注目を（数値化）し、その数値の高低でオンライン上の参加者の存在価値を判定するもの」と述べている。
- ・パティノ……ブリュノ・パティノ。『スマホ・デトックスの時代―「金魚」をすくうデジタル文明論』の作者。
- ・インスタ映え……「Instagram」などの画像を投稿するSNSで、投稿した写真が美しく見えること。

## 【文章Ⅱ】

子どもの権利のための活動に取り組む国際NGO「プラン・インターナショナル」は、15歳から25歳の若年女性の58%がオンライン・ハラスメントを経験しているという調査結果を発表している。また、ハラスメントを受けた若年女性の24%が身体的不安を持ち、42%は自尊心または自信を失い、42%は精神的または感情的にストレスを感じ、18%は学校で問題を抱えている。さらに、女の子の50%は、ストリート・ハラスメント（痴漢など公共の場におけるハラスメント）よりもオンライン・ハラスメントをより受けているとも答えているという。オンライン空間が若い女性にとって居心地悪く、危険な場所になっていることがこうした数字からも見てとれるのである。

しかし他方で気になるのは、日本の状況である。プラン・インターナショナルでは、日本でも約500人の同年齢の若年女性を対象にした調査を実施した。それによると、SNSを利用していると回答した若年女性は93%にのぼったにもかかわらず、そのうち「オンライン・ハラスメントの被害に遭ったことがある」と答えたのは全体の4分の1とどに留まった。

（治部れんげ 田中東子 浜田敬子ほか『いいね！ボタンを押す前に』所収 林香里「スマホ時代の公共の危機―ジェンダーの視点から考える」による。なお、問題作成の都合上、一部改変した箇所がある。）

問一 傍線部①「若者に人気の動画プラットフォーム、『TikTok』である」とあるが、「TikTok」の特徴として不適当なものを選び、記号で示せ。

ア ユーザーを飽きさせないよう、8本の動画には好みでないものもランダムで出るようになっていく。

イ 機械学習を用いて、ユーザーが好むコンテンツを予測し、バラエティ豊かに提供している。

ウ ユーザーの嗜好を判断する材料は、視聴した動画だけでなく、何の機器で視聴しているかも判断基準となる。

エ ユーザーの利用状況によってプラットフォームの企業価値が決まるため、ユーザーが好むコンテンツを提供している。

問二 傍線部②「テクノ資本主義の戦略」の説明として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 訪問者をサイトに誘導するため、フェイクニュースや誹謗中傷など、道徳的に良い情報を出す。

イ ユーザーをサイトに誘導する仕掛けはカジノと同じく中毒症状があるため、利用に年齢制限を設けている。

ウ ユーザーの滞在時間を延ばすために、ユーザーの好みの情報だけでなく、正反対の情報を出すこともある。

エ どのようなソーシャルメディアも、感情を害するヒステリックな討論を全くの偶然で表示させる機能をもつ。

問三 傍線部③「数の専制」である」とあるが、アテンション・エコノミーが「数の専制」である」ことによって生じ得ることとして、不適当なものを選び、記号で示せ。

ア ルッキズムが強化されたり画一的な「女性らしさの強要」が再来したりする。

イ 人間の性についての多様性やジェンダーフリーについての許容度が低くなっていく。

ウ ユーザーに対しマジョリティであることを示し、安心感を与える。

エ 多数派に立てば世論を味方につけられるため、企業は自らの信念を変えてでも多数派として発信する。



**問四** 傍線部④「女性、なかでも若い女性を追い詰めている」とあるが、その説明として最も適当なものを選び、記号で示せ。

- ア 利用者に注目され、利用者の滞在時間を長くするために、女性の体型や外見についての悩みが利用されている。
- イ 視覚的プラットフォームが提供する美の基準の幅が狭まることで目標の顔に近づきやすくなり、理想となる美の追求が止まらなくなる。
- ウ 典型的な美の基準が美容プラットフォームのフィルター上でしか実現できないため、危険性のある美容整形を行うようになる。
- エ 美容アプリが無料で提供されるものの頻繁に更新されるため、常に美容アプリを使用して安心感を得ようとする。

**問五** 次に示すのは、授業で【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】を読んだ後、生徒が話し合っている様子である。これを読んで、後の i、ii の各問いに答えなさい。

生徒 A … 私も「Instagram」をよく使うから、読んで少し怖くなった。

生徒 B … 美容アプリも、けっこう皆使ってるよね。美容アプリじゃなくても、プリクラで撮った写真をアプリで加工することもあるしね。

生徒 C … 私は SNS をそんなにやらないからわからないけど、日本ではオンライン・ハラスメントを受けている人は少なくてよかった。

生徒 A … けど、「気になるのは」って書いてあるから、単純にそうはいえないんじゃないかな。

生徒 B … そうだね。  X

生徒 C … 確かに。私も聞いたことはないかな。

生徒 A … そういうこととか、ネット空間でのジェンダーとか、女性の先生が増えてくれるようになるといいね。

生徒 B … ハラスメントに限らず、私たちが何も知らずに使っていることのなかに危険性が潜んでいるとすれば、どこかで教えてほしいな。

生徒 C … 私はあんまり使わないから関係ないと思うけど、将来のことを考えるとプラットフォームの危険性は確かに教えてほしいかな。

生徒 A …  Y

i 空欄  X  に入る発言として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 日本ではオンライン・ハラスメントよりもストリート・ハラスメントの方が多いから、オンライン・ハラスメントがニュースにならないだけだと思う。

イ 日本ではオンライン・ハラスメントは視聴率がとれないからテレビでやらないだけで、実は被害に遭っている人は多いんじゃないかな。

ウ そもそも、オンライン・ハラスメントっていう言葉を知らないから、自分が被害を受けたかどうかもわからないんじゃないかな。

エ オンライン・ハラスメントを受けた人は多いけれど、アンケートで受けたって回答すると当時のことを思い出すから、周りにも被害をいわないんじゃないかな。

ii 空欄  Y  に入る発言として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア アテンション・エコノミーは多数決の論理で教育の現場も味方になっているから、問題があることを教えるのは難しいと思うよ。

イ デジタル美容空間やハラスメントの影響によって、オンライン空間ではストレスを感じる場合があるから、教えることは重要だね。

ウ オンライン空間では注目される勝者であり続ける必要があって、それが生きていく上での安心感につながるといえるのは、危険性を回避するためにも教えるべきだね。

エ アテンション・エコノミーは、インターネットを使わない人を敗者とするから、勝者となるためには必ずSNSを使用しなければならぬことは、教える事柄の中でも重要だね。

【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、以下の各問いに答えなさい。

### 【文章Ⅰ】

一般に、科学の歴史については、次のようなイメージを持たれている人が多いのではないのでしょうか。すなわち、かつて科学はキリスト教によって抑圧されていたけれども、科学者たちの必死の研究によって一七世紀は科学革命の時代となり、そして一九世紀の進化論論争などをへて、ようやく科学は宗教に勝利した、というような図式です。これは完全的外れとまでは言えないかもしれませんが、やはり適切ではありません。このような見方では、ガリレオやニュートンがキリスト教信仰を持っていたことをうまく説明できませんし、キリスト教文化圏で近代科学が成立したこともうまく説明できません。

科学史家の村上陽一郎<sup>むらかみひょういちろう</sup>は、科学史における宗教と科学の関係を説明するために「聖俗革命」という概念を用いました。彼によれば、宇宙や自然について説明しようとする際に、どこかで世界の創造主である神に言及しないと物事の説明は終わらないとする立場を「聖なる立場」といいます。それに対して、キリスト教的な創造主に言及することなく、物事について考えたり説明したりすることができる立場を「俗の立場」といいます。一八世紀の啓蒙主義<sup>けいもうしぎ</sup>は、村上によれば、学問や知識の世界からいったんキリスト教的な枠組みを取り払ってみたらどういこうとが言えるかという実験を試みた時代、とみなされます。彼のいう「聖俗革命」とは、一八世紀に起こった聖なる立場から俗なる立場への転換のことで、聖俗革命をへて一九世紀に生まれてきたものこそ、現在の科学であるとされます。

① こうした歴史観に立ちますと、ガリレオの生きた一六〇一―一七世紀は、現在でいうところの科学はまだなかったもので、宗教と科学が対立するということもありえなかったことになりました。では、<sup>②</sup> いわゆる「ガリレオ裁判」とは何だったのでしょうか。しばしばこれについては、頑固な宗教家たちが、科学的・合理的な精神の持ち主を抑圧した理不尽な裁判、というイメージで語られてきました。「それでも地球はまわる」というガリレオの言葉（とされているもの）は有名です。確かにカトリック教会がこの裁判の誤りを認めたのは二〇世紀末で、ガリレオの死後三五〇年もたつてからでした。しかし、ガリレオ裁判は実際には極めて政治色の強い出来事だったと考えてよさそうです。ある研究者は、ガリレオは観察と推理によって自然界を理解しようとしたことの罪を問われたのではなく、教会への不服従の罪を問われたのだ、とも説明しています。この点については、問題の大前提を理解しておく必要があります。

中世のスコラ学における基本的な考え方に、神は「二つの書物」を書いた、というものがありません。一つは当然ながら「聖書」で、もう一つは「自然」です。ガリレオも基本的にはこうした見方に従っており、「自然」は数学の言葉で書かれていると考えていました。彼は、聖書と

自然という二つの書物を書いたのが神お一人であれば、そのあいだに矛盾などあるはずがない、という信念をもっていたのです。では、もし聖書の内容と天文学とのあいだで矛盾のように見えるものが出てきてしまったらどうすればいいのでしょうか。ガリレオは、そうした場合は自然に書き込まれた神の言葉の方を、聖書に書かれた神の言葉よりも優先させるべきだと考えました。なぜなら、自然という書物に書かれた数学の言葉は一義的にしか解釈されませんが、聖書の言葉は多義的に解釈される余地があるからです。したがって、両者間に矛盾のように見えるものがあつたとしたら、それは聖書の解釈に問題があるというふうにガリレオは考えたわけです。

ガリレオ裁判においては、どちらの立場の人も、自然観察によってこの世についての知識を得ることの意義は認めていました。そしてまた、どちらの立場の人も、信念の基盤を聖書に置くことの必要性は認めていました。この問題は、「聖書」と「自然」が互いに矛盾しているように見えた際の解釈の仕方をめぐる、カトリック教会内部における異なる見解の争いという色彩の濃いものであつたと考えられます。少し言い換えますと、「知識」を生産・普及させる権威を持つのは誰であるか、という政治的な点に関する闘争だつたと見ることもできます。ガリレオは、正しい知識というのは個人による読解や観察や推論によって得ることができると考えましたが、そうした姿勢は、当時、三十年戦争のさなかにおいては、ローマ・カトリック教会の権威に対する直接的な脅威ともみなされました。また、当時ガリレオを庇護<sup>ひご</sup>していたトスカナ大公国と教皇庁が対立していたという背景なども無視できないとされています。ここには実にさまざまな政治的・社会的背景があつたのです。

③ 科学的な知見それ自体は、必ずしも宗教の敵ではありませんでした。一六世紀半ば〜一七世紀初頭に日本にやってきた宣教師たちは、むしろ科学的知識や学問・教育を宣教に利用しようとも考えていました。一七世紀初頭の大殉教の際に長崎で処刑された宣教師に、カルロ・スピノラという人物がいます。彼は殺される以前、京都に数学と天文学のアカデミアを設けています。そして一六一二年には長崎で月食を精密に観測して、マカオにいた同じイエズス会士による観測データと付き合わせて長崎の経度を割り出すなどしました。日本では、天文暦学は長いこと安倍、賀茂<sup>かも</sup>両家による秘伝として朝廷に独占されていたため、宣教師たちによる実証的な説明は人々の好奇心を大いにかきたてたようです。イエズス会士の天文学的知識は、それまでの須弥山<sup>すしゅみせん</sup>思想や天円<sup>てんげん</sup>地方説を否定することにもなり、実証的科学や合理的精神で伝統的思想を批判する最初の契機になつたともいわれています。

太陽や月など、天体の運行はこれまで多くの人々の好奇心を刺激してきました。太陽や月に関する神話も世界に多くあります。ところで、一神教的な「神」は、太陽や月などとは違い、すべての人の目に見えるわけではありません。そこで、これまで、「神は存在するのか、存在しないのか」が問われてきました。この問いに関しては、神学者や哲学者たちによるさまざま「神の存在証明」の議論の蓄積があります。哲学史やキリスト教思想史の教科書を開きますと、神の存在論的証明、宇宙論的証明、目的論的証明など、先人たちによるさまざまな角度からの論証

について紹介されています。

しかし、「信じる」という行為の意味を問う観点からいたしますと、神の存在を論証するというのは、ちょっと不思議な議論であるようにも感じます。というのも、もし本当に誰もが納得できるように神の存在が論証されるのだとしたら、わざわざ神を「信じ」る必要がなくなってしまうからです。例えば、三角形の面積を導く公式は「底辺×高さ÷二」であり、簡単に証明もできるので、あえてその公式の正しさを「信じ」る人はいません。明らかに正しいことにおいては「信じる」という選択自体がなくなります。正しいこと、真であることはわざわざ「信じ」なくていいので、神の存在を論証しようと試みる時点で、それは「信じること」（≡信仰）を不要にしようとする試みであることになってしまうようにも思われます。

もちろん、哲学的には、これらの一連の議論には人間の「理性」や「認識」などをめぐる複雑な文脈があります。これはわりと幅広い背景から生まれた議論なので、ここでは詳しくは触れませんが、いずれにしても、<sup>④</sup>思想史における「神の存在証明」は、自然科学的な「証明」とは異なるものだと考えるべきでしょう。

（石川明人『宗教を「信じる」とはどういうことか』による。なお、問題作成の都合上、一部改変した箇所がある。）

語注

- ・ 須弥山思想……古代インド由来の宇宙論。中央に須弥山（ヒマラヤにあたる）があり、その周りに日月諸惑星が巡る、天動地平説。
- ・ 天田地方説……古代中国の考え方で、天は円形で、地面は方形であるという宇宙観。



## 【文章Ⅱ】

今日の社会のなかでは、科学者という存在はごくありふれている。むしろ、その存在がないということ自体が考えられない。しかし、今から一五〇年前には、科学者と呼ばれる人々の数は、数えるほどだったし、二〇〇年前には、皆無だったと言つてよい。という、直ちに反論があるかもしれない。ニュートンは「科学者」ではなかったのか、ガリレオ（一五六四―一六四二）は、コペルニクス（一四七三―一五四三）はどうか。ニュートン（一六四二―一七二七）が死んだのは一七二七年のことである。今から二五〇年あまり前のことだ。しかしニュートンは「科学者」と呼んでよいのではないか。私は、その反論には「ノー」と答えたい。

何故<sup>なぜ</sup>ニュートンは科学者ではないのか。理由の一つは簡単である。ニュートンはイギリス人であるが、彼は英語で「科学者」を意味する《scientist》という言葉で呼ばれたことは、生涯一度もなかったことが判<sup>わか</sup>っている。《scientist》という単語が英語のなかに登場したのは、一八四〇年ころのことで、ニュートンが死んでから一〇〇年以上経<sup>た</sup>っている。そういう呼び名がなかったということは、その名で呼ばれる実体も存在しなかったということの意味するし、そうだとすれば、ニュートンの時代には「科学者」と呼ばれるべき実体はこの世に陰も形もなかったと言つてよいはずである。

この話はいろいろな方向に広がる可能性をもっている。先<sup>ま</sup>ず、それではニュートンは一体何者だったのであろうか、という問があるだろう。それにも比較的簡単に答えられる。彼は哲学者であった。もつとも、ここでは多少の注釈が必要になる。ここでいう「哲学者」と、われわれが今日その名で呼ぶ存在との間には、かなりの距離がある。ニュートンが哲学者であったという時の「哲学者」とは、言葉本来の意味での《philosopher》である。言い換えれば「愛知者」である。ただここでの「知」すなわち《sophia》は、ギリシャでのそれとはずれをもっており、キリスト教的背景を強く持ったものであった。つまりニュートンの「愛する知」というのは、キリスト教的な神学に裏打ちされた「知」であった。

なるほどニュートンは、現在の概念系に照らせば「物理学」に近いことも研究していた。しかし、彼はまた聖書についても、大変熱心な研究者であった。彼は、自分の神学的立場から見ても、いわゆる三位一体論に強い疑問を抱いていた。アタナシウス（五世紀の神学者）が捏造<sup>ひねぞう</sup>した聖書の章句によって、後代の人々はだまされているのであって、キリストの立場からすれば三位一体論は誤りであるということの証明に、彼は情熱を傾けていた。また彼は、考古学的な研究にも多くの時間を注いだのだった。しかし大切なことは、そのようなニュートンの知的活動は、現在では稀<sup>まれ</sup>にあるような、物理学者がホビーで考古学を勉強したり、あるいは聖書神学に手を染めるということとは全く違っていたということを理解しなければならぬ、という点である。考古学を勉強するのも、旧約聖書のなかに現れる様々な「歴史的」事件（例えばノアの洪水のような）が、正確に何時<sup>いつ</sup>起こったのかを、地質の特徴から推定できると考えたからであり、また彼の「物理学」的と見える仕事も、神がこの世界を

どのように創ったのかを理解しようとする営みとして行われたものであった。

もちろん現在の科学者と呼ばれる人のなかにも、個人的にはキリスト教信仰を持っている人がいるだろう。その人が、自分の自然探求の目標は、神の被造物であるこの世界をよりよく神の意志に沿って理解するためだ、と思うことはないとは言えないだろう。しかし、現在の科学は、そのような前提から解放されることをむしろ薦めるのであり、少なくとも「科学」がそのような神学的な自然解釈を共有しなければならぬと考えている人はいないはずである。しかし、ニュートンの時代には、ということとは当然ガリレオやコペルニクスの時代においても、ということになるが、彼らの知的活動の本質が、まさにそのような「神学的」な立場からなされるところにこそあり、それを除いては知識が成り立たないという確信が、知識人を束縛していた。したがって、彼らのやっていたことは「科学」ではなく、また彼らは「科学者」ではない、ということ、それほど奇矯なことではないのである。

言い換えれば、ガリレオやニュートンのやっていたような知的活動が、「科学」へと変化する過程では、少なくともキリスト教的な自然理解の枠組みから、知的営為が解放されることが不可欠であった。その解放過程があつて初めて西欧の知は、「科学」という伝統を新たに創造するのである。私はこの解放過程をかつて「聖俗革命」と名付けたことがある。

(村上陽一郎『科学者とは何か』による。なお、問題作成の都合上、一部改変した箇所がある。)

問一 傍線部①「こうした歴史観」の説明として最も適当なものを選び、記号で示せ。

- ア 一七世紀以前はキリスト教的理解によって世の中の仕組みを説明していたという考え。
- イ 現代の科学はキリスト教的世界観の考えを共有しつつ、宗教的説明から自由になって発展したという考え。
- ウ ガリレオやニュートンが聖と俗の両方の立場を使い分けて、世の中の仕組みを説明するようになったという考え。
- エ 現在の科学は啓蒙主義というある種の実験をへて、神に言及することなく物事を説明するようになったという考え。

問二 傍線部②「いわゆる『ガリレオ裁判』とは何だったのでしょうか」とあるが、「ガリレオ裁判」の説明として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 自然を、科学的・合理的な観察によって説明することを否定した裁判。

イ 聖書と自然には矛盾は一切生じず、聖書の考え方を優先させるべきとした政治的な争い。

ウ 聖書も自然も神の言葉であるが、矛盾が生じた場合には自然を優先させるべきとした裁判。

エ 聖書と自然の解釈をめぐり、知識を普及させる権威を持つものは誰かという政治的な争い。

問三 傍線部③「科学的な知見それ自体は、必ずしも宗教の敵ではありませんでした」とあるが、そのように言える理由として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 正しい知識は、個人による読解や観察などによって得ることができるとあるから。

イ 数学と天文学の学校を創ることで、教育を布教のために利用しようと考えた事例があったから。

ウ 長崎とマカオで月食を計測することで、長崎の経度を測定することができた事例があったから。

エ 日本古来の迷信を否定することによって、キリスト教の優位性を伝えることができた事例があったから。

問四 傍線部④「思想史における『神の存在証明』は、自然科学的な『証明』とは異なるもの」とするのはなぜか。その理由として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 自然科学が証明する場合は目に見えるものを扱うが、神は目に見えず、思想史が扱うしかないから。

イ 思想史では神学者や哲学者などが様々な角度から研究したが、自然科学は科学者が一面的な見方からしか研究していないから。

ウ 思想史における証明に取り組んだ人は皆、神の存在を信じていたが、科学者は神の存在を信じていなかったから。

エ 思想史からの証明とは違い、自然科学的に神の存在を論証しようとする、神への信仰を不要にしてしまうことになるから。

問五 次に示すのは、授業で【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】を読んだ後、生徒が話し合っている様子である。これを読んで、後の i、ii の各問いに答えなさい。

生徒 A …【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】のどちらも、一般的に思われている中世の科学者像が前提になっているね。

生徒 B …そうだね。  X っていう前提がありそうだね。

生徒 A …そういう常識と思われることを否定しようとしているから、キリスト教信仰について説明を加えているんだろね。

生徒 B …確かに、ガリレオ裁判は、地動説を認めたくない教会が、キリスト教的世界観を否定して地動説を唱えたガリレオを呼びつけて、地動説を封殺したのだと、単純に思っていたよ。

生徒 A …だけど、ガリレオもニュートンもキリスト教の枠組みの中で物事を考えていたみたいだね。

生徒 B …だから、現在の科学が生まれるためには、  Y が必要だったんだね。

i 空欄  X に入る発言として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 科学者はキリスト教的枠組みから離れて、実験・観察から世界の法則を導き出す人

イ 科学者はキリスト教的な一神教は否定するけれど、多神教的な考えは認めつつ、普遍的な法則を考える人

ウ 科学者は哲学者に近いとしてもいて、様々な対象について存在の証明を考えている人

エ 科学者はキリスト教に迫害されていた人たちが、たくさんの人がいた

ii 空欄  Y に入る発言として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 聖書に記された「歴史的」事件を、キリスト教的な考え方からではなく、客観的に証明しようとする態度

イ キリスト教を信仰することなく、キリスト教的な自然理解の枠組みから脱して考えること

ウ キリスト教的な創造主に言及することなく自然探究を行い、結果として神の意志を理解しようとする態度

エ 神学的な立場から解放された知的活動を行い、神学的な自然解釈を共有しなくてもよいという態度





